里見八犬傳 拾七編 巻四十四

へ18
709
95

遺門 13
號 709
卷 95

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第九輯卷之四十五四

東都　曲亭主人編次

第百七十回　定正水路ふ大兵を行る　音音江中ふ一船を焼く

話表を這時武藏ゐる。五十子の城内ふ。十二月五日の早天ふ。陸地の諸將。山内顕定其子憲房足利成氏扇谷朝良千葉自胤四家の隊長白石重勝大石憲重横堀在村原胤久等各數萬の軍兵を將ゐ。下總の葛飾ゐる。真間國府臺及行德を投くうち向ひゐ。今城内ふ在る士卒ハ。三萬餘名ふ過ざりーふ五日六日ふ至りて。甲斐の武田信昌の名代ゐの武田左京亮信隆を首ふく。近國の野武士伊豆相模ゐる海賊每勢と見て利を測り。ヲを負く敵を侮る。烏合雲集の客兵。凡慮二萬餘名俱ふ

定正の隊に附き欲りして各先非を謝し忠義を倡て皆五十子の城に
推参せ事の便宜に是のごとくに上總る故の榎本の城主千代丸圖書
助豊俊が舊臣濱縣馬助（浦安牛助友勝が偽りの姓名なり。）を密使として降書を齎し
且其家臣の宅眷なる老弱四個の婦女子を保質に参らせく海上火攻の
約束あり。獨巨田新六郎助友が父道灌の名代として糟谷の館より領令て来
る隊兵を僅に五百に過ぎず況や今番水戰の利害を論じ理義を詳に
なく定正を諫るに犯さざるところなりしかば定正怒ること堪ずして追退けく是を
用ひず遂莫定正親子に相従ふ水軍の兵も既に五萬餘に及びて開ぐ
中に南海道より移り来ける海賊の頭領に水禽隼四郎緑林錦帆
八四九郎近範と喚做せあり此に是鄕尚に三河の苛子崎宅犬江仁姥
雪與保蛮崎照文等に對治せれし海龍王修羅五郎今純友査勘

太と伯仲せべき驕勇の名煕煉なく舷をりく家とせられば水戰の進退を
辨まると極めく賢しく且一千餘の支黨あれば定正其罪を許さず則先鋒の
頭人とせ威勢かくの如くそ且赤嵒百中の如き者の幇助あれば
猶且敵の胆を拉ぐ為に上とく總兵五萬を偽りく十萬餘騎とぞ倡へける然
れども這隊の水軍に十二月八日の早旦に洲崎の港口を攻破りそ稲村の城を
拔くべしと逆ト定まりければ定正朝寧父子に尚五十子の城内に在り恁而七
日の早旦に大石源左衛門尉憲儀に精進し沐浴して鎧の上に淨衣を
被く駛馬に乘りて百個可の士卒を引くに谷山に赴く馳く
馬より下立く攀登りく山の半腹なる洞内を覗に那風外道人に青石の
上に結跏趺坐して香を焼き合掌して經文を誦して在り當下憲儀も
恭しく拄を朝ひく師父よ喃大石憲儀が詣に人鄕尚に教めし為の水戰に

（本編前板に精進をせ[illegible]みと偈訓せしと恨人とのたまへり友て思ひの足らざるに精進をせ[illegible]と土偈記に見えされば恨みあるべし）

宜紀日は既ふ是明日ふ至り収らく那順風を賜ふべ兒や。艦出い幾時候と好
とせんその義を詰問まれとぞられ。寡君の名代ふてそはるれ教ゆと請問
へば風外道人領ぞく善哉々々。信男信士現明日は八日ふ至り収貪道
ぞぶ教を更んや明日丑三の時候より。諸艦齊一漕出く。三浦
澳ふ猫児を下ーね其折俺大ぞ亦小ぞ順風をりく。又蛆く那澳へ
推のそ遣ん徒而其詰旦欲明の時候より。俺又猛烈ぞ順風を
起ーく敵を火攻ふ便宜を汲させん。その餘の夕は前ふ示ぞ如ー。孤ぞ疑
ひそ勉めよかーと言諄ぞ宜示せば憲儀額衝ぞ阿と答く示教ぞ
ぞ退りく寡君ふ反命せばさぞる歓びのむ復ぞ見参せけれと告別
身を起ーて山を下り馬を早めく五十子の城ふ入る。隨即前條の
趣を遂ぐ。少え上ーば定正いよく信仰ーて兎毛の杪ふ置く露許も

敢疑ふ心ぞく。然らば疾艦汰ーて。這曛昏より諸軍兵を分ち載せ
ようめれと詞急迫ーく下知まれば。憲儀は唯々とぞろふ答て躍く退り出く。其
隊毎ぞる隊長ふ下知を汲くいそぐまるふ。冬の日ぞれば短くて夕陽西ふ淪ーぞる。
士卒は反て准備ふ遑あらべ。左右まる程ふ七日の月の没る時候ふ五十子の城
内ぞる。将帥五萬の軍兵まで皆悉出畫ーて陸を離れ水ふ就く紫浦より
大森まで海上遥ふ見耳せば兼浮めぞる千百の戰艦は布儲ぞる碁石の像
く。五彩の旌旗八色ぞる戰幟は夜半の浦風ふ閃めぞて緑波も寄せあぞ。
晃々とーて星影ふ光を爭ふ八千鋒は神代のむーー早蠅成も魔軍降伏
天泰らけ紀例もかくやと負ーー思ふ無心ふ勇ぞあり。然ば寄隊の大軍は子
二剋の時候よりーて。衆艦漸次ふ漕出ーー。三浦を望く走らまる第一番の
先鋒の頭人大茂林小彦和中と濱川小渡鋏久ふ新附の海賊の頭領

水禽隼四郎緑林錦帆八四九郎近範を副として其隊の海賊と倶に五千餘名巨艦四五十艘を乗こる第二第三の隊い小幡木工頭東良士卒相従ふ者五千餘名大石源左衛門尉憲儀士卒八千餘名有名の兵頭是に従ふ者勘くなし第四番い定正の長男上杉式部少輔朝寧と副将として武勇の老兵昵近の青侍華美に擐甲する者一百餘名雑兵と倶に一萬二千餘名こる第五の隊い總大将扇谷修理大夫定正随従の兵頭其田源次兵衛后綱信城左衛連頼九本佛九郎望洋城峰麻生介廣原是ものと宗徒の隊長として従兵二萬五千餘名總軍五萬餘れば千百十數箇の巨艦に真帆揚く白浪に轔る舵の响高工们が調に棹の歌皆野干玉の夜を犯して衆艦三浦の澳邊に造る豫風外道人の契り風術差ふことなく猛可に順風吹起りて投方便宜なれば舵工等い都て烏夜に惑ひ又蚤く三浦の澳に到る武田左京亮信隆い艦を出すに最遅けれい始より遠く諸艦に續く胡意遥に引下る那身い隊兵のことを打く艦を覓く行後れ遠く浦河の澳に猫児を下る風の便宜を候こと定正朝寧いかく諸艦の隊長士卒ども波上の暗に紛れて是を知る者みなかりけり然れば寄隊の諸艦い既に順風に吹送られて暁寅の初刻に風三浦の澳に来る衆艦都て帆を縮し猫を降し相歌く風外の約束の順風の亦復吹起るべ死其天の明るを候に開ける中に仁田山晋六武佐と敵の戰艦を燔盡さ死火藥の頭人なりけれい柴薪焔硝をヨヌく積載する二三十箇の快船を営り且千代丸豊俊の保質なる老婦人音音と隊り守前日より柴浦に在り去る所に這晋六武佐い其性酒を貪りく且酒癖ありければ當役を兼て日より過失ありんことを怕れく絶て酒盃を採る

とゐるゝ〜ふ既ゆく十月七日の下晡ふ造りて同船る隊の兵等ふ向ひくふ
ゆう我ゆゑ汝達も連日勤務まつりければ疲労るゝん既ふ是今
宵真夜半ゆ大将御艦を出させぬ人も我も従ひまつりて死活の境ふ赴くふ
切く嗜る酒へとも思ひの隨ふ喫ぎもあらぬ何をゆくよく胆さへ肥して宅眷を
忘れて死地ふ就く忠戰を致さんやあの故ふ我既ふ奴隷毎ふ吩咐く其頭の
准備もあくるへ先や和郎等と献酬あく酔を盡して鮮纜と等んとのふを
大家うち呼て。そは歴史御計ひふへ然ばく御酌仕うんと答る間ふ奴隷の輩
ぐ酒を湯め酒菜を出して桜を排る船の内る客の間特ふ陜ければ音音も
膝を並べて居り當下仁田山晋六と盃を執抗げるゝ音音を見ゝ合笑て
昔ハ知らぎ今ハ是枯樹ふ降る雪の白髪額ふ寄る波濤松柏の肌膚ふ
そと思へとも酌ハ婦女子ふ極れり是飾てよと指出せば音音も倶ふ微笑く。

嗟夫御見出ふ與りまつりて恥しくそ仕るゝれ足駄の端緒ふ敗亀索も時の用
ゆ達ゆあらん相応しかる聆娘役梅ゞ香るゝ枯野の密房非如刺とも
甲非ゞるしそ不甘る喫しめされそと戯れるゞゝ十分ふれ師とも溢さふ花女の色煉ふ
大家ヤヤとうち呼て受け流しつ行更ゆ現是酒ハ狂藥ゆ礼ふ始り
乱ふ終る武佐素より強飲るふ隊の兵も咸高量ゆ呑と宛大蛇の如く
刺と恰も蜂ふ似るふ音音ハ喫ぎ。よく提撕く昔採る杵柄の美音謡ふ
あゝるゝふ点を添る早歌ふ舌も達らぬ武佐と倶ふ衆兵乱醉して舷ふ凭
れて反吐と突くあり。額と敲く呻吟くあり。艫の間ふ侍らる。雑兵奴隷舵工高
師ゆ鱒を敲けく足るとゝ知らぎ。殼を窃ゝそ好ゞるゝを思ひぎ。比自悉醉
臥く。喚べども応へぎ。披けども起ぎ。死人ふ仁田山晋六们既ふ日ハ暮れ更て蘭
主將定正の衆艦ハゆゝ已ゞ與る火茱の船も皆定正ふ従ひて倶ふ漕去

去を知ざれば。獨武佐が兼ねる船のみ。舊の伽を柴浦ふ在りの口い音音のみ醉
ざれば。枕を乱して熟睡とあるる武佐們を相て嗟嘆ふ堪ぬ肚裏ふ思よ。
這仁田山晋六武佐い六稔以前戸田河ふ。我兒子等を害しる。
仁田山晋五が弟ふ。大石親子ふ仕へぬる二代の權宰と京人の噂ふ聊知り
ぬ。然らでも這奴い火藥の頭人自家の為ふ害ある者と這奴が預る火茱の
船い方僅寄隊ふ從ふ。ヨヘく漕去りぬれども時ふ臨みて這奴が在らぬ放火ふ
頭人。故ふ先ふ。ある火茱の船い必便宜と喪ん然いとそかくまでふ醉て睡
ア晋六ぬと醒しも果ぬ刺殺さば姥とても武士の妻ふ似げぬ。そ人や挾
せん要とそれと尋思をあるる。樹亘しる張灯の光ふ就て船床ふ。鉄砲一挺
悄と引よせて。火線を合ふる火を移して見れば這鉄砲ふ両丸さへ竜てあり。
ある究竟と开が依ふ右ふのくふ引着て臂近ふ。ある長盆ふ。西復ひ隠ふ

今更ふ東く胷を推鎮めくも果しなく。そだくその物思ひ更ふ軍節
妙真刀自ふ。鄙ふ別まく。城内へ捉ぬ竜らまし。後の事安危什麼と人
情ふ訪ふ。ふ。とくも浪枕身ふ浮舟の憂ふ。ある両箇の愛孫へ。ある我
使ハ今も差ふ。犬江腋子と共侶ふ枯れ。冬野の草枕旅宿して尚京師ふ
在狭と思ふのまく。南末與美の甲斐ふ別ふ。ある我今宛家の覚ふ
俟ふ。計ふが如く船を焼て脱ぬ去るが暇ふ。我身も倶ふ火煙ふ。そ
両館莫大の御恩ふ報ひ。ある老の命を惜んや。ロハ両個の孫。両個の媳ふ別い
鴛鴦の剣羽や。竟ふ水ふ身を果ふ過世ふ。そとへ。ある品打ち波濤ふ。ある
だの雨も無氷ふ。ある冬の夜の浦風寒ふ。ある群知鳥慰めいせぐ友喚ぶ。ある殿耳の往
へ方ハ何処星光り天ふ餘波の銀漢俯仰瞻ふ。ある點頭ふ。夜ハ刃三刻と過ぬふ
け。這白徒ふ。ある醒ぬや。疾々覚よと思ふと言ふ。ある出さで。ある咳くのみ。ある叔母と

候へ長夜に蝋燭将に竭んとするや。船に機し張燈の火光小暗くなりぬ。然れども更闌て霜氷る夜の潮風に吹醒るゝ武佐们い稍明るくと志す時候の咽吭渇き睡り覚ゝ。俱に頭を擡げて四下を見ゝるに敬蔑にてあるいふせん鈍か御主君尉殿の大石憲儀を以て の御船いゆゝ雨館定正朝宰い無船きしくて。洲崎へ推寄せめひけん這頭に一箇も艦なく乗り込あよるに越度を致しぬと悔て頭を擡くもあるを武佐噪がゞ深念として聲苛めく喚るゝ既に時分を失ひぬ。御伴に後れる越度い勿論越度なれども然りとてかくて在るべきにあらず先疾船を出さゞやと焦燥ぎ噪がせば。高師们が稍覚て阿と応ゝ遽しく帆を揚げ纜を解く程に武佐い又一二の小頭人を身邊へ招きて嘆くやう我今即処の計あり。期に後れる分説あり那保質の老女奴を又蝕く殺さにあらずとふを小頭人等訝りて開い又何等の故るやと問へば答て然がよ我今船を走らせて御艦に赴着きなゝく。禀さんやうい臣等御伴に後れるゝ中途に禍事あるべく其故い昨日臣等に預けさせめひける那千代丸豊俊が保質の老女奴を里見の間諜児なりけん隙を覘ひ胆太くも臣等を刺さくあそけるを捕へんとせる程に支黨の五人数十名忽焉として快船に乗走るゝて援け来る這方の船に乗り移りて老女を帮助く戰ひと臣等並に隊の兵士で力を勤せ奮勇して敵を漏さず殺沈め老婦を擒へ捕りの由這闘戰に時移りて今に及びぬと実検に入れるべ必遅参の御咎を免るゝのみならず反て御感に干らん這説什麼と悄やうに其計較を告る程に船柴浦を漕離れて大茂林濱の澳に出けり。登時件の小頭人毎に武佐が奸計を皆聴訖り額を分ちて俱に憶ぬ倉笑て開い最奇妙なりと称て後方を見ゝれば音音い聰く其機を猜て准備の鉄砲。含るゝもやく。

音音身を敎ゝて
仁田山が柴薪船を
燔く

銃口其方へ推向け。雄胆魂氣聲悍やうに若们驚き噪ぐなせそ。仮倘い既に吟知ぬ。今武佐が奸計は反て是我実情を我を誰と思ふらん。量義は戸田の河邊なく。武佐が兄仁田山晋五が緝捕の手兵と血戰あく。竟に戰殺あつける。十條力二郎尺八が母犬山道節が舊老僕あく。今は里見殿の家臣る。蛟雪代四郎が妻。音音は我と武佐。汝も寃家の半隻思ひ知るやと明々地に名告。被々銃砲の火蓋を鑽く撞と發せば。那時遅這時速武佐はあく驚慌て。立まく走ける程あもあく吭を撲地と毆る拔れて叫ども果ぞ仆れけり。吐嗟とだら隊の兵毎は立日音と捕捕んとく。推稠篭る間もあらせず。音音は銃砲を更して舟の内は積措れける。量義の火茱は擲ちて身を伸さる舷より海へ水入と飛入りける。其水音と共侶は火線の燈児詐多紀量義の焰硝は燃と燃移る這時速。猛火激烈威勢迅速現百千の雷霆の。一度は隊を崩るに異なぞ。

人はちと柴さへ舟さへ一瞬間は焼盡されて遺るは僅は舟底のみ水は遁れ音音は行方知れず。悲はかりや。あり磯鴛測り知ぬ死活の海あり水涛の建られ奴迹あり波とぞ知れける。

第百七十三回

數艘を借く大角義武を拉し
擇旗を建て豊俊定正を愚ぶる

却説犬村大角礼儀は那日の早天は五十子の城を立去りく。先谷山は走り、大法師と商量て隨即所從の雜兵二名を安房なる洲崎の陣営へ遣あて。那人壽策の成まるよりを犬阪毛野は告げ。ぐ開がかり来ると俟んを躰く相模路は赴ぐく便宜の浦邊は在り。程。次の日の夜は至りて両個の使の雜兵と俱は城内雜魚太郎貞住を隊の兵三百餘名を領く快船はうち乘すそ約束の浦邊は走り。犬村は對面て則義成の密謀と毛野の意表を聞死伏れば使は建ける雜兵を。毛野の回翰を含ませて。先大角は呈覽。且其反

命を具ふ。是ふ由り大角い其言を聴て。貞住ぢ。の快船い安房へ返して一箇も留めぢ。隊の兵ゐ皆東西へ分ち潜せろ。水戰の日戎俟つ程ふ既ゆて大角い洲崎の陣の事の光景及大阪毛野を軍師ふ做さと。自餘の七大士い防禦使るゐ。並ふ大角ゆも賜るぢ。御大刀を現八ふ渡しぬ。犬飼い犬塚と共侶ふ國府臺ふ敵を俟つ。那地の防禦使るとゐく。毛野ぢ是を與りて。權且藏措ちて。則今番の便宜をゆく。堀内貞住ふ是を遞與して。大角ふ偽へ。大角い其君命を羨り。這賜を受まる。其悅び。ゆべうもあらぢ。又只是ゆのゐるで。犬塚信乃犬飼現八ゐ。東辰相杉倉直元们と俱ふ義通君ふ俱しまろく。國府臺の城ふ敵を迎るゐ。又大川莊介犬田小文五ゐ。彷徳口ふ出陣して。俱ふ敵を俟つと云水陸の隊配この餘の事。千代丸豊俊ふ彷いまる。毛野ぢ反間の計畧。又這密策ふ預りゐ。浦安牛助友勝。音音曳

てひとよ。ゐの時具ふ少えつぢ。大角深く感佩ゐ。單節妙真の敵地ふ赴ぬ。ゐまでも。ゐの時具ふ少えつぢ。大角深く感佩ゐ。

老。貞住ふ悄語くゆ。吟くぢ如ぬい這一策い則是苦中の苦ゆて。危しも最殆ゐ。故何とゐ。ぢ音音妙真両媼と曳ゐ單節女兄弟ぢ千代丸豊俊の密使と偽唱へく。柴浦へ至り。時定正必保質ゆく。件の四個の婦女子を城内ふ留め置くべ。恁而水戰の日ふ至りて。定正焼れて敗績ぬ。脱れく五十子の城へかく来い必怒ふ堪ぎし。と音音妙真曳ゐ單節を戮さることを。ぢんや。恁れば大阪ぢ計る所。則自家ぬ勇婦四名を售て。徒其死地ふ入るのを。抑又危ふぢや。然りとはいへども。暦日ふ危をのく。黄道吉日と。事危ければ。必慎む慎む時い失寡し。大阪ゐ理と知ぎしく。叨ふ苦計を。ぢんや。因ゐ又ゐのふ大阪一舉ふ敵を破らば。外ゐと追ひく五十子の城を拔べゐ。ゐ段ゐて。この苦計を。ぢふゐん。定正城ふ入ることを。ぢぎ城兵防禦ふ他事ゐく。何人ゐ亦暇ゐく。四個の勇婦を害

せんや。已に知り又敵を知りて大阪が計る所。必ず違ふべからず。非如他の及ぶ所。我も亦水戰の一計に與れり。然るに四個の女流ふたり軍功及ぶ二の町をば生く安房へ還るべからん後の思ひ出ふかし。あの義を忘れぬなれと告る意表ふ貞住に有理々々然り。然もと答く感嘆あるけり。是より大家影を隱し跡を埋めく候へ程ふ十二月七日ふ倣りて犬村大角礼儀ハ堀内雜魚太郎貞住と共倡ふ甲冑ふ身を固めて隊の兵三百餘名ハ新井の海邊ふ赴き貞住と隊の兵を率ひ俱ふ這累在るを却大角ハあの宵初更の左側ふ雜兵十名許を從て新井の城ふ赴き城門を敲き喚る是ハ今番肩谷殿へ新附の野武士の頭領赤品百中と喚ぶ者ハ年来足柄ヨリ武澤ふ住る同志の毋を駈集来く明日の水戰ふ拔て先鋒さきまくもあの義前日山内殿より當城へ通達せられ一ぢん顯定主の付契ふ在りあの義稟しゆとも喚ハ門ひけり當下門衛の士卒是をうち守り応と答ふ左右ふ容れず隨即門卒を走らく。恁と注進あるければ這新井の城主なる。三浦陸奥守義同うち守りあの義ハ隊山内殿より諜し合されるけれハ今ハ疑ふべくもあらず然いとく今の世の人心由斷せば後悔あらん咱先對面して其符契を相く艦を借るべし。爰よ兵毎其赤品百中と伴當一両名をあの門内へ入ることを饒しね必由斷せざるべしとのひとも。身甲の上ふ獵衣烏帽子を着装ひく。小刀を腰ふ跨へく力士二十名許を從へく玄関ふ歩程ふ近習ハ燭を秉て先ふ立ち大刀を執く後ふ跟く。小心者ハ閑ふ歩程ふ護門の士卒ハ君命の趣を大角ふ傳へ示して那身と伴當一両名を角門より裡面ふ入らせて玄関ふ案内をあの當下大角阿容る色ふ引れて玄関ふ登る點し連ね燭台の目光く星ふ異なるぎ。上坐ふ城主義同発児ふ尻を樹く在り左右ふ侍る力士ハ狼の如くふ見るの。蚺の像くふ疾視へる。面魂凡庸ならず近習ハ主の後方ふ居り跳

の本事ある者あらんと見えざるかをりけり。既ゐく大角い程よき処ゐ跳くを義同みづから聲を被て赤品百中とい和郎ゐやと向へい大角額衝ゐる頭を抬げて。然シゐ顕定主の齎せゐ。借船の符契ゐ在りいろ〳〵戰艦十艘と焔硝柴薪を借まく欲もゐの義を仰付させゐと乞へい義同黙頭て。その義へ隊ゐ。ゐるゐ。和郎の隊の兵幾名ゐやと向へい答く。然シゐ同盟の毎ハ二百餘名ゐを。近辺海邊ゐ留めくゐて来ぎ。小可ゐ伴當へ僅ゐ是十名のみ夜分の憚りあれば大。とりひく聊退く。躯て鎧の懐錄より符契を含出く呈れば一個の近習身を起しまく。把て主君ゐ呈覧ゐるを義同やをう受合もりゐ。近習ゐ燭を抗させて。懐よりゐく隻符を出〳〵自他合せ見て。相違なしと。獨言ち符契を藏めく。又大角ゐ向ひくいふやう。持参の符契ゐ疑ひなければ敢異議もべくもあらぬ。艦ハ昨日より准備させく。焔硝柴薪と共ゐ遠くゐ馬頭

上ゐ在り。旌旗水幟ハ甚麼そや。と問へい大角。然シゐ。其二種ハ扇谷殿れ預けゐるいひを。相携くゐへゐ只御艦と柴薪をのみ貸〳〵ゐるゐ物足りてんと。推辞を義同ゐあらぬそ。そもその准備あるべけれども我艦ゐ我水幟を建ぎ。人ゐ貸さえや。且愚息義武ハ項者風寒ゐ感冒されてゐまぐ病牀を出れば。両館領家の催促ゐ従ひまるとゐ。他ハゐ〳〵我を送ゐ送艦る方るゐゐるゐ。義武ゐ代るべ。死ゐ勇士をければ黙止ゐゐ和郎今我艦ゐ乗りく先鋒ゐ找むを幸ひ。我も亦両三個の兵頭ゐ雄兵四五百名を授けく。倶ゐ戰ひを帮助くべ。とゐを大角推辞めく。并ゐ然る故もゐいめど。小可今番両管領のゐ為ゐ死をのく敵を敗らまく欲まるゐ。今ゐ他兵を雑へれんハ素より望む所ゐあらぬ。且小可ハ扇谷殿の先鋒ゐく。當家の加兵ゐあらざるゐ。縦艦を借るとも。當家の水幟を建られんハ亦事の宜ゐゐあらぬ。這理を思ひ

文溪堂藏

文溪堂藏

めつぎやと氣色を変て論ぜれば義同一霎時沈吟して実ふかうれぞ其理
あり。和郎一器量微りせば這席上の孤客ふーく我ふ對ひて恁まで意衷を
遂さを論ぜん。武勇ふ顧て望ふ任せん。疾々退りひへとく。躰て士卒ふ吩咐て
准備の馬頭上ふ送らせれば大角面を和らげて开ら天ふくいゐれ郎君の御矢
安を猶も御保護あれと口誼を舒別を告く。外面へ退り出れば城兵五六
名蕉火を振照し。犬村主僕を角門より出ぬく馬頭上へ送る程ふ堀内雜
魚太郎貞住ハ二百個の隊の兵と俱ふ甲夜より這頭ふ俟て居り這海濱ふ
維ぎて。新井の戰艦ヨ多ふ中ふ両曾領の需ふ応ぎる。准備の艦十餘艘あり。
其一艘ふ。焔硝柴薪さへあり。也。船小屋より番卒ふ遣與せ。貞
貞住も共侶ふ鈌びを述受含く。其艦毎ふ士卒三十名づ分ち乘ふ。
各各撥乃弓箭火銃器械あり。且楫を含り艦を操る。舵工さへ匿

かくされば測茫る大洋の間ふ迷ひぞ齊々と艦柏子揃へて漕出ぞ夜のまぐ
丑ふ過ぎけり。有係一程ふ三浦義同の獨子ありける三浦暴二郎義武今
宵も尚病牀ふ。無公龍く在りけるが件の事の趣をうち守しより送恨ふ堪ねぞ
横児撞遣りて身を起あて。枕方近く惜せる。鎧を含く身を固め太刀を
佩ぶ一具あり。兜を看病の女房ふ持せ。走りく親の身邊ふ跪くまう
暴ふ太倉然とーて意ふもあり。當家ハ是人も知る両曾領の親族なるふ。
今番の戰ふ値ざるハ児が病着の故ゆく是非の及ぶ所なれども。赤品一百中
とう吸做る。相模野武士ふ先を駈させ。我艦と貸て乗せ。
隊の軍兵をぞも出し遣りゆ。ざるに甚麼ぞ。今より艦を出さ。海ふ浮て射
方の大兵と。ぞ。明日の先鋒ふ拔ん暇稟もとのうも既ふ立まくあくけるを
義同急ふ喚梵ゆく。ぞれ義武和郎の遺恨ハ然ぞ工ぞう。身ふ猶熱邪を

帶るゝ。夜を犯し海ゝ浮ゝて。暴死潮風ゝ吹冷されゝば寒熱忽地再發して。
大刀拔くことも克はまぐゝ。狗滅を做さんのみ。そもそも勇士の本意といへども然ば
這回の鬪戰ゝ我ゝ伊勢長氏の麾下にて出陣を禁められ加兵ゝ親族をもく
名代ゝ出せとある重役なれば。非如その義ゝ及ばぎとも。後ゝ外聞ゝ恥べし。已ねくと窘
とゞ義武聽ぎ推返して。不古我身この曛昏より熱邪退ぬと覺ゝ今ゝ
心地清ゝふるゝ縱病着復起るとも。武士なる者ゝ百萬の大敵と血戰して。
命を其首ゝ捨てこそ名と後の世ゝ揚げもせめ。蒲團の上ゝ起臥まく婦女童
蒙ゝ看病せられて。死ぬると本意ゝ做ぎべけや。いかでも為ぬとこれども。當家ゝ平
氏ゝ付ゝ上杉氏より養嗣せられく。本領安堵をこゝより。両管領家ゝ親族
ぞ。藤原氏の血肉なるゝ。這回大事の鬪戰ゝ不知出処の野武士ゝ舟ゝ貸
たるのみゝ。阿容々々として出ぎもあらぬ世の胡虜ゝなるの義なるゝ饒

さぞのと詞烈しく答も果ぎ。衝と身を起して外ゝ出く。急ゝ隊の兵を召聚
るゝ。惴雄の壯士等ゝ今宵出船を恨ぎく。倘兵頭を出さくとりやあらん
と思ひしゝ甲夜より各甲冑をく。戰飯ゝ飽ぎる者ゝく。今ゝくと俟つ折るまべ。
這武者決を咬くとぞ隨水崎蜑人甲良亀九郎。小磯真砂五郎など喚
做ゝ。兵頭を首ゝく。ゝ銃ゝ前後と乱さぬ。雄兵都て一千有餘城の玄関の頭
より正門の内なる。翁城ゝ処陜まぐ聚合ゝ。義武ゝ忻然と。鑣奴等ゝ牽寄
ぎる。馬ゝ揺哩とゝ跨く海邊を投くゝ程ゝ。又是准備の戰艦あゝ二十
艘維ぎてあり。番卒毎出迎ぐ。艦ゝ柴薪焰硝を。食ゝ入れく。水懺を配建なども。
當下義武ゝ其戰艦二十餘艘ゝ隊の兵五十名々分ち乘せて。其身ゝ胡意快
船ゝふゝ乘りて。大角の赤岳百中と逐まくも。頃ゝ十二月八日の曉天なれば。渺々たる
大洋の波瀾鳥くして。星影移らぎ。刃成を寒風ゝ面を撲く。諸軍兵ゝ並べ

憶む戰栗る。肌膚粒竦色蒼然く。身ハ生るぐ。戮児ゆ来るらんと思ふ可ふ堪ぐけれバ。弓舎る。矢ら〳〵如く。其弦凍て断るもあり〳〵と。獨ゆの艦隊の主將る。三浦暴二郎義武ハ。今茲十八歳の少年なれども。武勇力藝。親ふ劣らぬ。勇ハ萬騎ふ敵もべく。膂力ハ千鈞を挙るふ堪う。遽莫今宵ハ病後ゆ出陣心許るゝと思ふもるゝ〳〵ふ。辛ふ〳〵ゆの曛昏より。寒熱共ふ瘧りく。氣力衰へねバ。夜風の烈しゆを物ともせず。疾百中ふ赴着んとゆ連りふ舵工をいそぐ。然バ又犬村大角ハ。有徳るべしとハ知るゝもるく。既ふ義同を欺くく。十箇の艦を借ふく。漕出せども。去向をゆぞ。堀内貞住と。船を並くゆく程ふ那城内ゆ〳〵ゆ〳〵事の趣ゆ。城主三浦義同と。問答詰論の顛末ふ。悄語々々告知れバ貞住以下の老兵まで覚ず俱ふ含笑まゝ。愉快のゆとぞ稱えける。浩処ふ新井の方より。漕ゆ来ぬる快船あり。忽地ふ聲と發て。其首へ漕ゆく衆船ゆ。野武士の長と覚えるる。赤品百中もあるる。ゆ〳〵ふ。我ハ三浦陸奥守義同の嫡子ゆるる。三浦暴二郎義武ゆるゆ。權且艦を止めよと。喚りく。近つ近来ぬれバ。大家敬馬くむゆ中ふ。大角佐と見久るく。毫も噪ぐ氣色ゆく。然へ赤品百中ふ。ゆ〳〵ふ在り。何ぞゆの所要ゆぞと。答る詞ゆ。果敢ゆ。義武の快船ハ。這方の艦ふ漕よせく。其隊の兵ゆ。鈎素ゆぞ曳よせ。鐵留ふ程ゆ。ゆ〳〵ゆ〳〵三浦の伴船二十餘艘。水崎蜑人甲良亀九小磯真砂五ゆ。追風ふ儘せ推續ぎ来く。犬村ゆ十許艘の艦の前後を捕囲ゆ。ゆ〳〵ゆ鈎素ゆぞ一箇も漏さゆ皆生擒々と撹留めけり。當下暴二郎義武ハ。犬村大角ふ向ひ。やゝ。其隊の頭人加勢の野武士赤品百中ハ。和郎ゆるよ。我名ハ豫ゆ。ら我ハ親の名代ゆぞ。疾五十子の城へ参るべ〳〵ふ。憶む風寒の病着ゆく。出船遅々して。今ふ及ぐ。和郎ハ新附の加勢ゆく。我艦ふ乗るかゝ宜く我

隊に従ふべし。と威勢猛く宣ひ、大角馬を冷笑ひて、開ハ謂ふ所多くひるべし。咱ちハ明日五十子の城内に水路の御道寺に向べし。と定められ給ひの者多く今ハ他人に譲らんや。這艦ハ三浦氏より出されたりとも我私に借ふるに有らば扇谷殿の處分なく課せ所要に充めハ則是扇谷殿の船に同じ。然るに這艦に乗れば、和殿の隊に隷けらるる。管領家をも憚らで隊に従へ。欲を狩年少にして遠慮なハ最烏滸人と云ふべし。義武満面朱を濺ぎ、怒難る聲高く、軍神の血祭に首を捕んを覚期せよと刀の柄に手を掛るを大角猶も怕る色なく、非理の詰問の道理なる威勢をもく克まるや。和殿腰に帯剣あるを我も亦身を護る是この刃を以て敢敵ふと撑まるとも一朝の怒に其身を亡ぼ。是君子の慎む所。小人の悔る所。然るを和殿事を好むの敵に反忠まるゆゑ、ちん。ゆゑ里見を攻伐ぎて、同士鬩を做さるゝ何をりく管領家に忠とせん義とらん。然る狂人に敵ふ。とのゝ世も果ぢ義武ハ働と身を起して艦に脚踏撫々大角を斫らんと叫ぶ聲と共に刀を見りと扶放せば左右に在りける老兵毎吐嗟とぞ推隔く抱に禁く諫る程に猶且這隊兵頭水崎蛮人小磯真砂五郎も義武が怒を言る其苛聲に驚く。船と他ひ移り来て、倶に義武を諫るゝ。那赤品百中が過言ハ憎くゆへども他も亦管領家の御隊の兵でハ同士鬩を做されるべ非如今番の闘戰に御軍功ありとも後難免れがたゝ。枉く饒させ。と理り切に和解をゞ義武ハ老黨の意見を聽ざるゝ。うち領に退く刃を鞘に藏ども尚理らぬ怒氣と共に口惜々と罵りけり。話分両頭。その日十二月八日の暁天に扇谷定正の諸軍船ハ三浦の漕に猫児を下して風外道人の風袱を

の。起き順風を待つ程ふ幾千の艨艦ふ樹豆一〜る張燈い波を照らす水ふ映して魚鼈もあふ寄るるべし。浩処ふ洲崎の方より快船一艘漕のそ来つ降人と書寫しる。弦樹張燈を指抗くうち振りく喚る者う。是いかなる安房の降人千代丸圖書助が密山使わく。濱縣馬助と喚ぶ者と火と言の言上あるをのく。いくぐ直訴おなさまく欲さ。あの義を亶ーぬとふ聲共侶ふ近つく。扇谷の士卒小舫ふ乗る出迎へ鈎留めて。引て大石憲儀の艦の傍ふ犯く。偖と注進をければ憲儀則水幕を抗さをを出て濱縣馬助ふ對面さ這馬助ハ浦安牛助友勝と當下友勝が家ふ豊俊隊約ーまつり如く今日表も旦開の水戰ふ豊俊里見の衆艦の背よりうち起りそ火を放ちく。凱ふ出べし。但ーその折乾の順風の最も烈ーく吹沿つ。豊俊が放火ハ里見の衆艦ふ蒐らぎーて向火反く我艦を焼ん然れば豊俊ハ里見の衆艦を

漕脱て逆く又蝟く火を放さんその折御艦を找めさをく。俱ふ火攻あぬ公勝十二分ふ防べし。ふの義を諜ーまつ為ふ復さを推参仕りぬと実ーやふ説瞞ふ憲儀听々黙頭て躰く小舫ふ乗移りく。引て定正の艦ふ造りく。件の義を告ーくべ。定正悦び大々こるべ。其義我よくあるべく。疾衆艦ふ下知を伝へく。旦開の進退を示さべ。豊俊主僕大功あらば。賞禄ハ異日の沙汰ふあん先この旨を答諜をて馬助とやらンをかへ遣のれ。とふを友勝側聞ーて憲儀ふ向ひてふ曰。既ふ天明ふ程ふるべ。小可憖ふ安房へ還るべ。里見の士卒ふ怪あめられて事の破れあを做りいん。終日今の御答を豊俊ふ告げぎとも。御同意ふとうーまさべ事違ふべくもいかまふの義を亶ーぬね。と請へ憲儀又黙頭へ。道御友勝のふとと又定正ふ告ーくべ定正ふく感悦ーて現其遠慮を謂あり。然べ其馬助を。憲儀汝の隊ふ隷よ軍忠隨意るべけれ。とふふ憲儀異

謀も多く。御諚美りゐ此柴薪を積る船毎に既ゐ御伴ゐいへども。其頭人を課る。家臣仁田山晋六をゐ多くゐ不便るべ。然れば晋六が来ゐるまで這馬助を代とーて那役ゐ充ゐつ便利ゐそゐ。ゐの美怎麼と請問へば定正笑ゐ又點頭て現他ゐ主る千代丸豊俊ハ既ゐ故火の頭人ゑ且主僕倶ゐ安房人ゑ波上の掙ゑ自由ゐ人ゐ其一役を課ゐ。反て仁田山晋六ゐ優ゑとゐ。あらん退て柴薪船を遮與ーねと云くり貌ゐ吩咐れば。憲儀唯々と言美ーて船を漕せち退ゑて。却友勝ゐ柴薪船を預けて其進退を任せゐ。友勝ハ思ゐゐ倍る事の首尾の十分なるゐ笑を刃心ひつ欽び謝ーて。そゐ。ちくゐゐ留りけの左右ゑる程ゐ縛糧ーく東天稍無暁と云ゐる時候風外道人の約束違ゑ。乾のりくゐ天引ゐる横雲の間よりーて。勁風颯と吹起りて。激波高く艦揺めけば。ゐの期ゑ云ゐる寄隊の

大兵寒氣も俱ゐ忘るく。ゐ。孰ゐ欽び勇ざゐん素破乾の順風吹出ゐ。皆疾猫児を曳抗て寄せゐと。呼りて位置を守りて漕出ゐ。先鋒ハ則當田軍の兵頭大茂林小彦和中。濱川小渡鐵久士卒五千名。並ゐ新附の海賊の頭領水禽隼四郎緑林錦帆八四九郎近範。其徒二千餘名を左右の副とゐ共ゐ雄兵七千餘名其艦一百許る。次ハ晋領四家老の隨一ゐ。小幡木工頭東良。士卒三千名。次ハ上杉式部少輔朝寧ゐ大石源左衛門尉憲儀を副とゐ信城左馬遠頼九本佛九郎望洋ゐ是ゐ従ゐ其兵一萬餘名。次ハ總大將扇谷修理大夫定正。従兵三萬千百十數名。其田源二兵衛后綱白峰麻生八廣原ゐ及阪東ゐ有名の郡司御士の是ゐ。ゐ者共ゐ。又降人千代丸豊俊の密山使る那濱縣馬助ゐ。柴薪船を預けゐ。先鋒ゐ従ひく找る武田信昌の名代る武田左京亮信隆と新参の

浮浪人赤品百中と仁田山晋六武佐のみ中途に障ることあり。秋去の時なれども其船見えず。定正を首めとして朝寧憲儀東良等はいとゝ機密を知りて老兵を今ちゝ他者を後んとす。躊躇ふ内に遠あらざれば寄隊二三千箇の戰艦舵を轉らせ艨艟を鳴して整さとして前後を乱さず。乾の順風に儘せて徑に洲崎へ推寄せて稲村瀧田の城を屠りて義成親子の首を捕んとて勇ざる者なりけり。事の勢正に是曹魏江に浮かべて呉を呑まく欲りし。胡元海を渡りて東に寇せし日も徒やありけん戰世の人の心は死活の海を海とも為ず波に彼岸遠く後の世を思ざるこそ薄情けれ。

第百七十四回　萬里一水道節小仇を射法　八百八人毛野大敵を麾

却説去の時安房の洲崎なる里見の陣営に囲守安房守義成主昨十二月七日に至りて軍師犬阪毛野防禦使犬山道節並に兵頭小森但一郎高宗及諸兵頭老兵と恩赦の罪人故の上總の榎本の城主なりける千代丸圖書助豊俊等を召集へて明日の水戰の隊配を定めらる。印東小六明相荒川太郎一郎清英木曽三助季元小溪目堅宗等も倶に這席に与りける。開ぐ中に犬阪毛野は獨君命を兼て諸隊の前後を配分し先鋒則小森高宗に千代丸豊俊を副として毛野が謀る所なり。其船毎に柴薪焔硝を積入れる放火を宗とせべし與次は犬山道節に荒川清英印東明相を左右の副とし次は軍師犬阪毛野に木曽三助季元是に從ふ從軍の諸頭人の交名は牧舉るに遑あらざれども自餘の五大士と東辰相荒川清澄杉倉直元田税逆友登相良千満呂重時鮎船茂足東峰春高堀内貞住等は或は陸地の敵を防ぐ與或は情地に謀を授けて他方へ遣りて中に犬江仁姥雪與保は京師に

と。剰蟹崎暇文と田税逸時。苫屋景能を重ねて京へまゐらせられば當陣ハ勇士多くして義成の艦と出させず。倶ハ大敵を防ぐべしとあらーを軍師亂智禁め禦して當陣ハ本事ある兵多くまゐらねども事十分ハ謀らざれば大敵も怕るゝハ足らず。且明日の水戰ハ君ぢの処を動坐あらば反て守衛薄くして萬一の時誰かよく陸おうち登る敵を防ん且奸民郷兇の野心も料りがたければ猶ぢの御陣ハ御坐さしそ後安くはべけまと其理を舒べ諫めーゝ義成ぢの議を信容れて曩ハ水戲水馬の調煉を檢覽の與ハ建させしる望洋甚堂ハうち登りて明日の水戰を觀んべーと定めるる折ふし瀧田の城より堀内藏人貞秀が老侯の使として安房と拜問の與ハ來ハければ義成歓びて對面あり幸のまえとそそぐ侯ちハ留めあらせて瀧田へハ別ハ使を遣そこあるを請せる明日貞秀を當陣の一頭人ハ充んとそん獨小湊目のを明日の隊配ハ漏しゝ痛く望を失ひて思難て毛野ハ在下ハ原是老館の御使を差ゝ瀧田より參りーかども同僚東峯鮹船等ハ既ハ用ひる別ハ用る所あり。いそがざるまえれば。其美ハ及ざり兄耳とよせひと膝を找めて情ハ情ハ論るやう。明日水戰の時ハ臨て朝風必異ハるゝん其折和殿ハ五百の雄兵と倶ハ快船十餘艘ハうち乘りて敵ハ當ハで蟇直ハ蛛く武藏の河崎渡もべー。鏡内葉四郎と雜兵猿岡様八ゝ倶ハ其故郷ハ武藏ぢ。矢口と欲ハ那里の地理ハ具ぢべー因て他ぢと従せん那地ハ届りて進退ハ留様々と説示せべ。小湊目ハ欣然と差欲びて退ぬく事の准備とあらけ。恁而大阪亂智ハ大山道節と共侶ハ明日の軍兵を整るハ諸頭人と船長ハ君命を伺へくハやう。約莫明日の水戰ハ各ぢ進退あり。意ハ勅命明の

時候より乾の勁風起ることあらば敵の大兵艦を找めく葛直ふ推寄せ来べ。然りとても我諸隊の艦い猶皆岸ふ在りて動くべくもぞ其風変りて巽ふるらば敵を逆へて火を放ん事を要とも勿論館の御軍令ふ隨ひまつりて縦勝ふ乗るとても多く敵を殺せべくもぞ只い生拘を全功とも倘違ふ者あらば立地ふ是を斬ん艦あい今宵柴薪を積載て旦開の戰飯い各各艦ふ在て握飯ゐべ。旦纏腰飯を忘るべくもぞあの芒い天津九三四郎が稲村より来て炊飯の支役ふ指揮ふべけれい事ふ礙滞あるべくもぞあの御言を汲まり。と言厳ふ説示せば大家敢異議ふる者ふく共ふ言義をあゆる开が中ふ千代九圖書助豊俊いあの日晋堂児堀内許より召出されて。あの隊ふ在り鄉高ふ義成主ふ見参を饒されて旦恩命あり。這回の開戰ふ大功あらば舊領城地を返ーゆへべ。と仰らるあられども豊俊い舊臣の浮浪ーて安房上総ふ在る者いいまゞあの義を知されば那身ふ一僕ゐあらば。遽莫先鋒の次将ふれい面目あまりあるべ。但而あの夜い無火を焼ーて既ふ暁天ふあらーば将帥義成主い望洋臺ふ登りて明日の水戰を見まく欲を致ー老黨堀内貞幼を首ゐて老兵士卒二千餘名臺上臺下ふ多く高張燈を掛且最も堅固ふ備へ。水隊い軍兵一萬餘名八日の暁天ふ至りて。一隊毎ふ士卒咸艦ふ乗果て。敵のうち寄せると候程ふ天い向明とあゆる時候より。乾の勁風吹出て磯打激波凄ーく。艦を遣るべ便宜ふあらねば士卒齊一感悟ーて果せる戦軍師の先見毫も違ゐぞ既ふ乾の勁風発りふ敵推寄を。ふ程いあらーば。怠ていこの風吹変りて巽ふてそるべけれと思へば都て勇こあり寒風肌膚を冒ーを忘れて弓弦を潤ーつ火銃の丸を龍ん敵を俟つ威勢あくふ振然ーて。介程ふ扇谷の諸軍艦ゐ既ふあの順風を沿て。欲び勇ざる者あらば各正帆ゝ七八分ゐ。風のまゝ走ーまるふ皆是巨艦ゐるをりて。猛風洪波

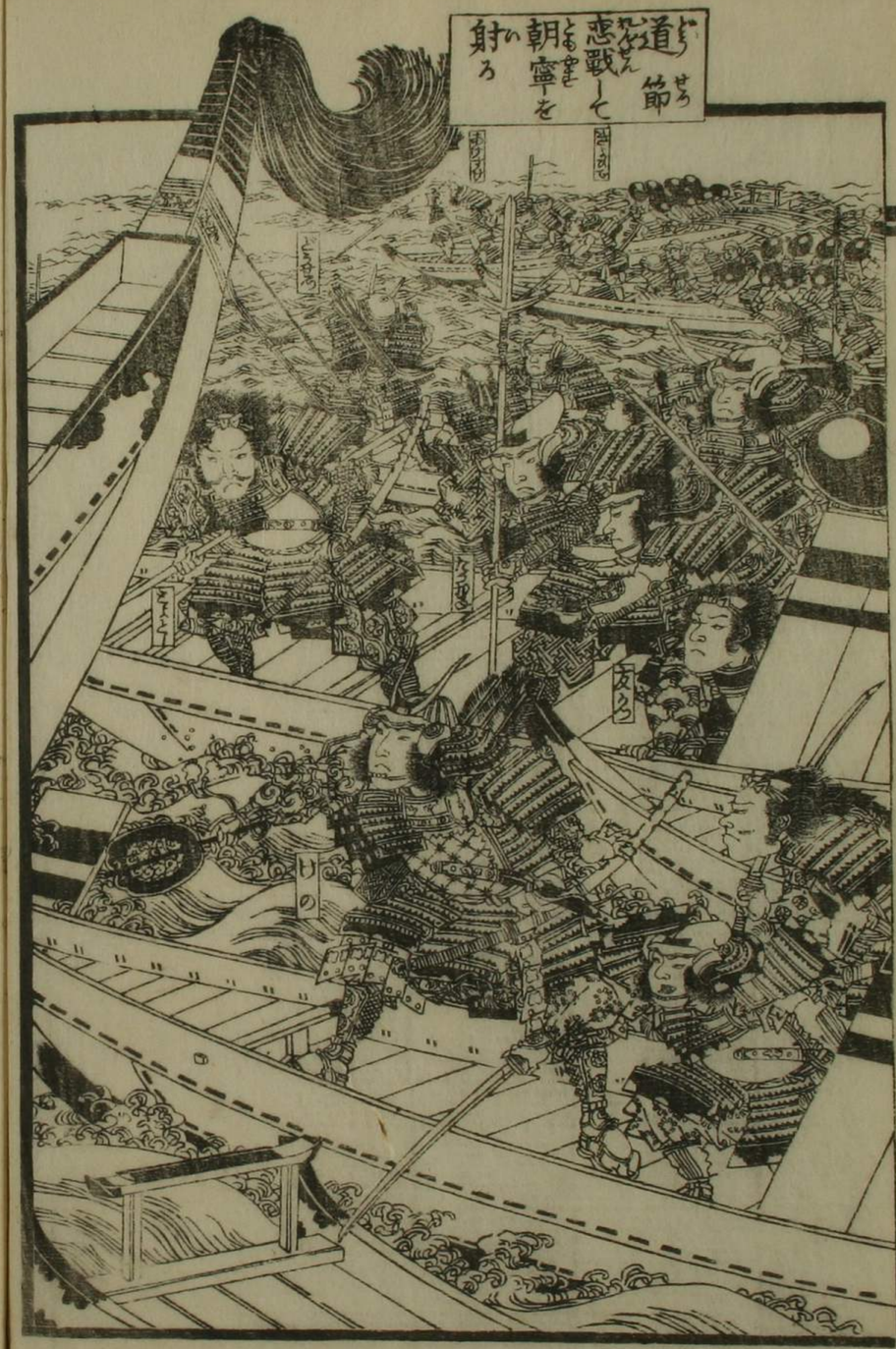
も危ふく浪三浦の澳より洲崎まで。水路五六里ゐ足らぬれば。今いまだ一里許のやうなべらんと思ふ程忽地ゐ風歇み波理りて衆艦都く亀も走らぬ足いふと。詠る程ゐ其風猛可ゐ変りて。よく便宜を失ふ折ふし洲崎の岸より。突然と快船十餘艘漕出す。前多敵のうちも逆つぎ波を横ぎり。一瞬間ゐ武蔵のくへ漕去りける。是則別人ゐらず。小濱目堅宗ゞ鮫内并柴四郎。狙岡猿八等と五百の雄兵を従へて。目今那地へ渡来けり。當下軍師犬阪毛野ハ一萬の軍兵一千有餘の戰艦を三隊ゐ分ちて。鼓を鳴らさず憾戎振らせて。連りゐ士卒を找れば。則先鋒の頭人多。小森但一郎高宗千代丸圖書助豊俊ゞ隊の兵二千。艦二百四艘波を開て漕出す第一番多る水幟ゐ降人千代丸豊俊と寫せ。扇谷の先鋒の艦多。大茂林小彦濱川小渡並ゐ水禽隼四郎錦帆八四九郎ゞ。いへゆうえ後方ゐ續く寄隊の衆艦大石憲儀小幡東良將帥正副將軍も是を。原来千代丸豊俊ハ順風の便宜を喪ふ故ゐ里見の衆艦の背より火を放つと。ゆうねび胡意找して先ゐ立て。欲然るゆえも里見の士卒ハ他を怪て。制る者多。艦を連わて近づき来ゐるハ故あるとて。ゆうゆうゞ。疾濱騎馬助と召よせて。問ぜやと唱る聲も果ゐ間ゐ小森千代丸ゞ隊の頭艦ハ射る箭の像く漕よせ。倶ゐ准備の小柴ゐ火茸を爽て。敵の船ゐ投入々々。攻寄きまゝ。折ふし烈しき潮風ゐ放火の勢。一乗妻時もあらぬ。寄隊の艦ゐ在る所の柴薪ゐ其火移りて。發と煙立る程。もあらば。先鋒の衆艦免る者多。猛火と做りて。焔々。軒遇突の威勢。猛りもるゐ且猶浦安牛助友勝ハ扇谷の柴薪と預りて。先鋒の艦の後方ゐ在り。件の放火發ると見るゝ。同船の軍兵四五名を斫仆し。又斫伏せて。左右多る船の柴薪ゐ火を放ちて。猶も拒る敵兵。殘中多ゐ

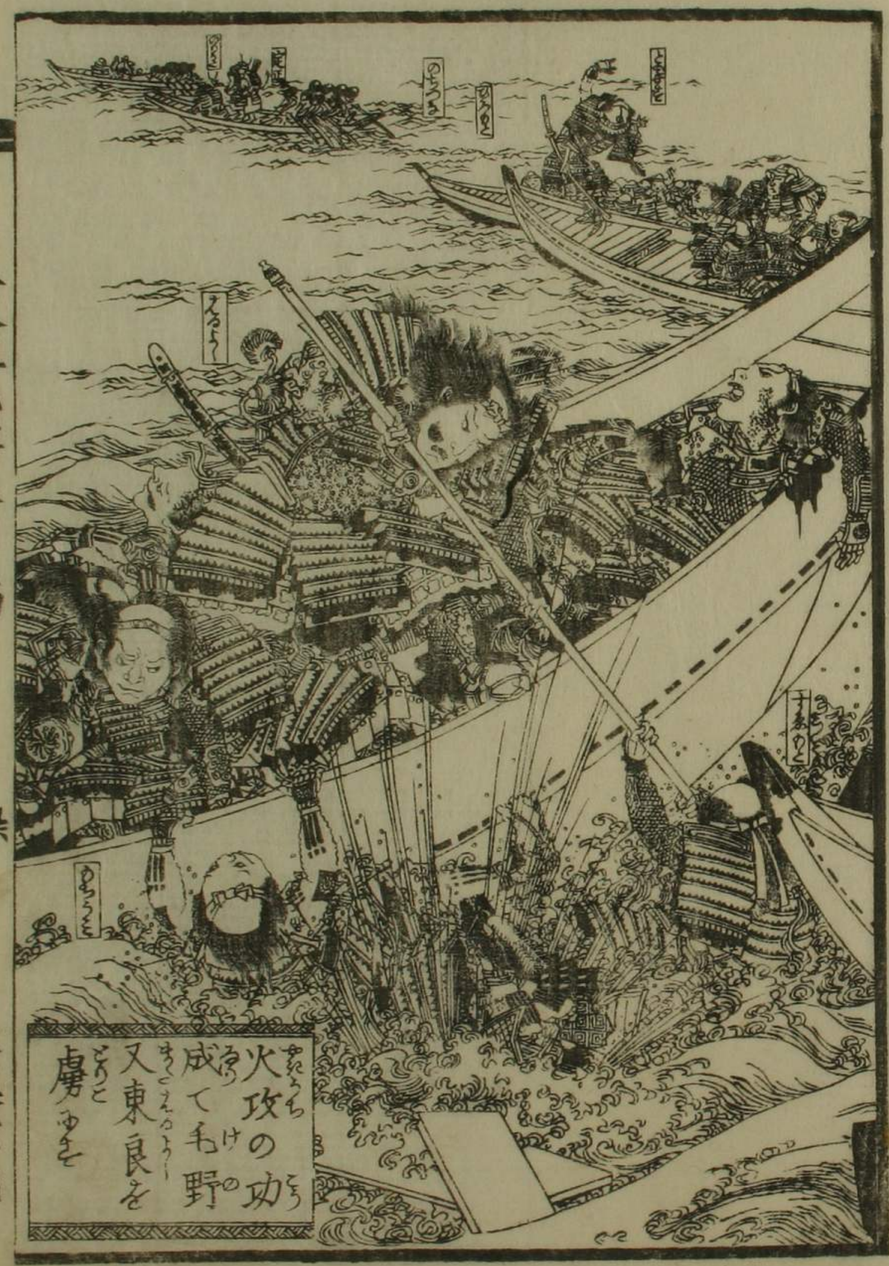
儘せ〻斫殺を大刀風と共ふ聲震發て愚る哉定正憲儀寄隊の兵卒皆
吶ね豊俊馬を敵ふ降ん我ハ其舊臣る濱縣馬助と名告りしハ実ふあ
らぎ軍師大阪の密策ふ従ふ〻定正を哄しゐる実ハ里見恩顧の頭人浦
安牛助友勝ゐると知ざるや若们ハ是鬼の群鳥這圈套ふ入りしれば皆炙
禽ふゐ〻んのこ笑ふべしと喚りつみづ〻〻艨と推衝と漕脱る自家の先鋒ふ
加りて俱ふ敵をを攻撃ける介程ふ風火ひよく煽ゐ寄隊の艦ハ一箇とて
其燬を受ざるもなしるべ将師士卒の差別なく〻ふとぞうふ慌噪
ぶつ度を喪ひ〻燬を脱れんと欲りして海ふ入る者ハ水ふ溺れく命を殞し
然るに猛火ふ身を焦して免るく者極く稀ゐ開ゐ中ふ式部少輔朝
寧ハ心疾ひ小将えければ又蜘くも艦を漕辟せ〻風側よりあそ三浦のかこへ
脱れ去んとゐる程ふ印東明相荒川清英俱ふ快船ふ乗走らせて二

隊の従兵七八百名返せくと喚りく透もあらせじ追蒐来ればゐ朝寧ハ近
習外官の老兵皆只主を撃せ〻と〻近つく敵と斫拂へ朝寧も亦防禦
射つ且戦ひ且走る逃るふ順風の艦ゐれば明相清英勇ゐるふあらねど波の上
自由ゐ〻で撃ゐ漏せ〻く見えゐる折〻大山道節忠與ゐ定正を生拘んとく
連りふ艦を找る程ふこ見れば落ゐく敵船ふあり明相清英二隊の艦ゐそ赶
へども竟ふ及ざりける其敵の旌旗水幟ハ是紛ふべくもあらぬ朝寧ゐ〻んと
思ひ〻べ心ひ〻くいそぎれゐ他ハ則定正の廃冢子ハ故主の為ふゐ寃家ハ
手隻ふ〻も當君里見殿ふハ是獲敵の骨肉ハ疾撃を捕らぎ印東
荒川噫ゐ寛〻と焦燥ゐ且我舵工を罵励ぜども間遥ふ遠ければ亟ふ
赶もつれがゐ道節ハ少く焦燥ゐ那里ふ落ゐく敵の船ハ扇谷式部少
輔朝寧〻と見〻ハ僻目欲恁ひ我ハ煉馬の舊臣今ハ里見の股肱の

臣八大士の隨一なる犬山道節忠與なるを知ざるや。返せくと吸ふ。箭間ふ言ふ程あれども豈脫さんやと執る弓ハ三人張ふ十五束三伏なるふ征箭ふ刻ふ。最も易ふ能雪固る箭尖を敵ふ向ふ波の立る隨ふ眉尖刀引提て見る処を道節ハ矢聲劇しく漂と射る。射られく朝寧一雲時も沼堪ず身を仰反せて大洋ふ隊まく水底ふ沈ける是ふ驚く其隊の士卒ハ吐嗟とどろふ。釼児をりく王を極ひ揚んとく。舵を留めくあり。程ふ印東荒川二隊の艦ハ波濤を冒ふ漕よせて乗移りく敵を擇ず斫仆す就中明相清英の大刀風ふ中る敵兵あるとるけれ。ヨヌくハ船の内ふ平張伏し或ハ跪ふ頭を敲ふく命を乞者尠ふ。ねど明相清英ふ向ふ笑ひく。ず益の殺生をべくぞとて皆悉く結扭せけり。有徳し程ふ道節ハ艦を走せ迂りく来る。遠光景を見て嘆るふ。小六太郎一

开ふ西ふ。其汰る奴们を降ずとも生拘るとも。穀潰しのみ何ふせん器械艤舵と天奪合ふく潮のまふく流し遣りね但ず閑ふせざるべハ我射て隨一なる一将ハ他ハ必朝寧ふ惜むべし遠箭ふけ。ふ落て水底ふ沈ふけん首を獲ざり。悔しさよ先ず猟んぞ求猟ぞや。と詞ふ急迫ふく罵ふ。士卒ふ下知して今朝寧の隊士る四下ふ。釼児を入れて搔捞らるふ水底深くて届ふ。ば又小猫を下さそく那亡骸を索求めく引揖さそく欲るふ流れふけん舷ふ契して剣を求ふ異ふぞ竟ふ其功あるとるけれ。道節屡嗟嘆して徒と知ば迂迫ふ必撃ふ捕るべし。ふ遠箭ふけ。悔しさよと獨言のみ士卒ふも倶ふ慰難くける。前巻第百七十回ふ現ハ箭を抜く。水死の将を救ふとある段を照し見るべし。當下明相清英ハ敵兵の器械艤舵と皆悉く結扭り。隨ふ流し遣る。没架船の往方定めぬ。扇谷の士卒ふも耻を思ハぐ蜻蜓の命生死と欲ぜ。流ふ儘ふる


道節
恋戰して
朝寧を
射る


火攻の功
成て毛野
又東良を
虜ゆ

船の内より共侶ゐ伊豆相模の方を見且て那見よ遥ゐ那里へ向く船ゐ我老館定正ゐ乞御坐をめれ臣ゐと倶さ乞ぬぎをとのを道節明相清英守て遥ゐ佐と相て原来定正ごゝ乞疾敵ゐ捕んと舶人公們をいそぐ立てゞ赶蒐る順風の舵ゐ尊ら乞ゑ伊豆狭相模狭武蔵野の逃水へとそ逃さゞと惴る心を勇れける寄下人の日聖見の先鋒の頭人小森但一郎高宗千代丸圖書助豊俊ハ浦安牛助友勝と相倶ゐ寄隊の前後より火を放ちく引ゑく敵の衆艦と焼ゑ乞ゑ扇谷の先鋒の頭人大茂林小彦濱川小渡其隊れ士卒共侶ゐ焼れく命を殞さゐる。然ども寄隊の總大將扇谷定正ハ大石源左衛門尉憲儀其田源二兵衛后綱白峯麻生介廣原と近習の毎のをホーて又蚋く數箇の小舫ゐ乗移り疾五十子の城へかへり入らんとく武蔵と投く脱去る所ゞ中ゐ第一の隊長ゐる小幡木立頭東良と頭人九本佛九郎望洋の隊の両艦ハ幸くして燬を免れ乞ども既ゐ其舵ハ焼亡て小舫もあらぢ乞ゑ倶ゐ漂ひ乞ゑ小森高宗千代丸豊俊浦安友勝並ゐ木曽三助季元ハ其隊の快船數艘をもく透間もあらぢ赶蒐る高宗と豊俊ハ九本佛九郎ゞ隊ゐうち向ひく兵を找めて攻戦ゐ佛九郎望洋ハ本事ある猛者乞れゞ左右ゐく敵ゐ乞ゑ伏られゞ其隊の兵も皆死を究めて免れゞと志と思ひけん敵の船ゐ飛乗々々或ハ引組ぐ刺迭へ或ハ倶ゐ海ゐ入る在昔壽永の戦ひゐ恁やありけんと思ふめる望洋ハ近つく敵を殺拂ひ殺退けて竟ゐ千代丸豊俊と鎗と合ふ一上一下と迭の奮男術を盡て両敵の船寄てハ辟ゑ辟ゑてハ合ふ生死の海ゐ潮成を知死期時孰先ぞと見る程ゐ豊俊既ゐ脆乱れて那身危ふくりけれゞ小森高宗是を見くゑ蚋くも船をよせ合せて遂ゐ九本望洋を厮敷ゐ乞れども倶ゐ軍令を守りく首を捕らを敵の残兵の降

るゝ饒して這鬪戰い果ゐけり。介程ゐ浦安友勝。木曽季元い両隊の快船二三十艘と飛ゞ似くゐ走らせ来く。小幡木工頭東良の没舵艦を盗木香桁の像くうち囲きく。掬んと競ひ蒐るゝ東良い毫も怯ずゝ他い是管領四家老の一人ゐく武勇抜萃の雪えあり。且其家臣木代漢彷太名増瀬五西郎と嗅做くる。両個の猛者ありけり。俱ゐ大の隊ゐありければ。主僕力を勠せ敵を防ぎく。撓む士卒を罵辱る刃尖鋭かりければ。友勝季元勇敢ーとゝども。尚鬪戰を互角ゆく。両敵雌雄を分ざりけり。然ばあの時大阪毛野胤智い小幡東良の猶勇ゐるを豫より雪知りくれば。友勝季元卒介ゐく。捕漏さとゐゐん狡とそ其身も船を找ぎく。間近く寄せ合せく。舳頭ゐ発児と建させり。銕をゆく輪縁ゐくる。軍扇を採んく尻を撼く。端然とーてうち見て居り。然ば里見の衆兵ゐ是ゐ機を汐く奮勇一倍勝ゐ無くる。開ゞ程ゐ浦安友勝。木曽季元い俱ゐ

那両個の猛者。木代漢彷太名増瀬五西郎と。挑戰ふと。半晌許。季元竟ゐ瀬五西郎を。だらりまえと。斫仆さゐの時。小幡東良い鎗の尖頭ゐ血と濺ぎく。近づく敵と幾名狡刺殺して。寄せ立ぎ。今瀬五西郎ゞ。敵ゐれと見ゞく。怨ゐ堪ざれば。奮然くる鎗含る。延く。耶と聲ゞ。季元の肩尖を。馬鹿と刺。刺きく。季元身と仰反せて。海へ。次と。隊ーゞ。東良ゐくと。鎗含る直ーて。二ーゞ刺んと。椎下ぎと。季元い水中ゐて。敵の鎗の蛭纏ゐ。楚と。推りくる身を浮せ。曳くる。隨ゐ敵の艦ゐ。跳り入りく。其鎗の幹を。握扱て。東良ゐ引組で。摞仆さんと。角へども。東良ゐ坂東ゐ名高る力者。へければ。敢又物ともせず。竟ゐ。季元と組伏せて。首と。搔んとと。首と。搦りく。抜すくせ。程ゐ。毛野い。持くる軍扇を。礙と。擲りく。彬錯ゐ。東良眉間を。打傷られて。颯と。漬る。鮮血と共ゐ。眼眩ーて。仰反れば。季元下より。反復ゐ。壁く。索と。被きく。ゐゐ。東良。脅力剛ければ。其ゐと。抓で。掙せず。當下。里見の雄

兵弩及浦安友勝い竟ふ木代漁伯太を斫仆して自家の士卒共侶ふ季元を相援けて折衝りつ東良を緊しく結束りつく牽居けり然ば小幡の隊の兵弩の悍兒者い既ふ斃られぬ其餘い敵ふ殺立られて今東良の虜ふ做るを拯ふ眼わらざれば誰ろ亦よく敵ふ中らん皆及を捨跪ぬく俱ふ擒ふ做りふけり恁而季元友勝い生口小幡東良を這方の船ふ移し乗せて軍師の実検ふ入れしが毛野い只管嗟嘆ふ堪ず憮然として云へるは現孫子を讀む者い非如温順の君子とは云へども不仁の心の起らぬ者し其人を殺して已を利する方の教ふ由れば現兵を凶器ふ成る哉抑我両館里見殿御親子い今の世ふ又汎易ら凡仁君ふ御坐せども我毎敵を迎へて死生を爭ふ這戦場わく何ぞ仁慈を行ふ由わらん是則乱を攪めく民保ふ湯武の心ふ同じかるべし已ゑくと獨言る貌を仁と更めて却東良ふ向ひて宣ふ小幡生今日の掙ひ視を驚ろき最愛さ我風火の謀をして寄

隊の衆艦を焼ひしより定正主と首わく其隊長諸頭人雑兵ふ至るまで敢敵ふ中る者ろく皆免れぬく欲る故ふ友て死る者ろ然りと和殿い乗る船の楫を焼れり故ゑるべけれど敵ふ中りて血戰して事のろふ至りしい尾礫の中る真玉ふ似ろ我其武勇を感るの故ふ解恕して かへ沼させん和殿一箇を饒しうとそ我勝軍の負べくもわらぬ。あるも我君の御心ん我私の慈善と思ひて兵毎度よ其素を早く解き。といとぞ母べ執家の雑兵何と共已東良ふ被しる赤と為ん解く撥遣り棄れば。東良い身の福ふ且恥感謝ふ堪ず姑且して毛野ふ向ひて宣ふ思いざりける慈悲放免現江湖上の噂ふ錯りぞ里見殿君臣の仁心ふ至んと是ふ就ても恥あれ這回扇谷殿の攻伐い佞人の讒る所我始より其刃を知れども諫く聽るべ成ふ由りざれば心ふもわらぞ我衆と俱ふ今日の水戰ふ従ひしふ一戰ふ及ぎて既ふ敗の大敗わり主将の安危を知るよりもるく我身一箇免れうとく今ひら何

ら
名の面目あり。故の城地ゐ還んや。君辱められ臣死せといふ。齋の田横、鳥取
部の萬の義烈ゐ及ぶとも。我も亦然いだろの。志い致さべ。已ん〻く是まで。と言ふも
詭らぎ傷る。雑兵の帯ゐる太刀を見れと抜含るもあれど。項ゐ楚と椎加てみつ
ゐ首を斫落して。軀い撲地と俯ゐける。恩ゐ優ゐる東良の勇猛義烈ゐ驚
嘆ぎる。友勝季元士卒们いゆゑ小森高宗千代丸豊俊も既ゐ敵ゐ戰ひ克く。
船を併べて在りしゑ這為体を視も所もあり。俱ゐ感嘆ぎりける。そゞ中ゐ大阪毛
野い憶ぎも膝を拍鳴らして。嗚呼果せるかな。忠臣義士の生を猷ひて。死を樂む志い
誰も低しそもべけれ。定正賢良ゐぐざれば。彷ひ都て道ゐ違へど猶其大丈ゐ道灌
ある。且那子ゐ助友ゐ又這小幡東良ゐ。あるとて其大職を失ぎ。削らるとあらとへ
ども。いまゞ亡びざる所以ゑ先ゐ這亡骸を宅眷ゐ贈りて我君の大仁大慈を知らあれ。
各よ兵毎其生口を解饒して送ゐく這意を告知せよ。とゐふ士卒ゐ云ゐく。恩

赦の一義ゐ及ぶ程ゐ毛野い又艇工ゐ課く那艦ゐ相応しかるべ。舵一挺を
擇ぶさせく。小幡の士卒ゐ取ぎれば東良の残兵ゐ頭を敲ぎ恩を謝して。
隨即東良の首と其骸さへ拾起しゐ故の艦ゐ移し載ゐ別を告ゐ。順
風ゐ儘ぎる帆を揚ゐ。相模地投ゐ還ゐ。舟ゐ迷ゐ如く世間ゐ脆ぎい
人の命ゑかくて又毛野渝智い高宗豊俊友勝季元ゐ。その日の挿ぎを巻き
ゐ。各戰功甲しる。千代丸生い藿罪を償ゐ足り及べ。就中木曾生ゐ。いでも
ある。ぎ武倉翁の季子ゐく。武者助の弟ゐれども尚青年ゐるとゐく。今
番初陣ゑと雖ゑ。小幡東良と戰ひ時。水中の挿ぎい実ゐ奇ゐして亦妙ゐ。
藍より出く藍より甚倉ぎ久後負しゐ及べ。和殿其肩尖ゐい浅痍ゐれども。潮
水ゐ入りてれい風く療治せよ。でく。とゐふ。軀て准備の茱を含ませて其鎗傷ゐ塗
ある。労勤ゐ閑ゐ。ぎれば季元深く感謝して。心八人ゐ勇ぎける。當下毛野い又ゐ。

約莫あの聞戰に大角が今まで歩て来ざるは故りやあらん心許なし獨那人のこゝろぞ敵の為に保質に成せられし妙真音音曳み單ん郎も恙なくぞ胸安々らん疾五十子の城に催寄て一旦城を攻合まゝに猶大敵を懲まに足らぬ四婦女の安危を訪ふ由なし今勢に乘らずして竟に大の圖を失ひ蛇を殺して頭を逃す後の患ひあらんぞ疾柴浦へ船を找ん諸軍兵士の意を汲て先腰戰飯を披くべしとて友勝等皆諾ぎて現那四個の婦女子は今も五十子の城に在ん定正逃て城に還らば必敗軍の恐に堪ぎて四個の保質を戮べしいそがのこの理りをとのへば亂知智黙頭て我も亦始より飽まで苦計を施さでれば此の田地に居りて非如定正燬を免れて城に入るとも只心怯れ胆落て防戰の備をなさんのみ亟に保質を戮さに暇なべらんの美に心易くてと解れて大家感佩も但大村大角が三浦暴三郎義武と爭ひ安危を具るべ開に又下回に解分るを聽ねかし。

南総里見八犬傳第九輯巻之四十二終